

「人生に『しかし』を」

イザヤ書 第40章 8節
ヨハネによる福音書 第16章 33節

説教 上山耕平伝道師
(大和キリスト教会伝道師)

私たちは知っています。「草は枯れ、花はしぼむ」ということを。これがこの世界の秩序です。また私たちは知っています。「世で苦難がある」ということを。これがこの世界の現実です。聖書は誰もが知っている、ありのままの姿を描き出します。そして聖書は「草は枯れ、花はしぼむ」という有限な世界の秩序、「世で苦難がある」という厳しい世界の現実、それらを認めながらもう一つの秩序、もう一つの現実を私たちに示します。それが「しかし」という言葉の後に、続いて語られています。「草は枯れ、花はしぼむが（しかし）／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」。キリスト者とは、この世にあって「しかし」という言葉を言える人のことでしょうか。そして「しかし」に続く言葉を持っている人のことです。宗教改革者のマルチン・ルターは、苦難の中にある時、“しかし、わたしは洗礼を受けている”と、何度も自分自身に言い聞かせたとされています。そうやって彼は、苦難を乗り越えたのです。

ここで重要なのは、なぜ「しかし」と言い得たのか、その言葉の根拠です。彼の言葉の根拠、それは主イエス・キリストの存在そのものにあります。主イエスが、この世界に向かって、そして私たちに向かって「しかし」と言われた。現実では終わらない、「しかし」と言いうる、神様が支配される世界がある。「しかし」という言葉でもってして、この世界の現実の先にある、現実を超えた神様の支配を、主イエスがお示しになった。このことが「しかし」と言いうる、唯一の、そして最大の根拠なのです。主イエスは言われます。「あなたがたは泣いて悲嘆に暮れる。しかし、その悲しみは喜びに変わる。」(ヨハネによる福音書 16章20節)。「あなたがたは死ぬ。しかし、わたしを信じる者は死んでも生きる。」(ヨハネによる福音書 11章25節)。「あなたは、罪の中にある。しかし、あなたの罪は赦される。」(マタイによる福音書 9章2節)。主イエスは「しかし」という言葉でもってして、私たちに永遠という秩序、神様の支配という現実を示されるのです。

これには世界も黙っていませんでした。なぜなら主イエスが語る「しかし」という言葉は、それまでこの世界を治め、支配していた秩序を

根底からひっくり返してしまうものであったからです。ですからこの世界は、主イエスの「しかし」という言葉を認めませんでした。そしてその「しかし」と叫ぶ声を打ち消そうと企んだわけです。それが十字架であります。主イエスを十字架にかけて殺すことによって、この世界は主イエスを黙らすことに成功したのです。しかし、その沈黙は長くは続きませんでした。三日目にあっけなく破られるのです。そう、主イエスが復活されたのです。その復活の主イエスによって立てられた教会は、この世にあって二千年間絶えることなく、今も「しかし」と叫び続けています。そのような、殺しても死なない生命力に満ちた「しかし」という言葉を、私たちは与えられているのです。

確かに、私たちの身体は衰えて行きます。また心が弱ることもしばしばです。神様を信じていても弱りますし、迷いますし、不安になります。しかし聖書は言うのです。私たちにふりかかる苦難を「何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません」(ペトロの手紙Ⅰ 4章12節)と。つまり『衰えること、弱ること、迷うこと、不安に思うこと、それら苦難に直面することは起きるに決まっているのだから、いちいち驚くな!』と言うのです。私たちは知っているはずで、「草は枯れ、花はしぼむ」ということを。また「世で苦難がある」ということを。しかし私たちはもう一つの世界についても知っているはずで、そう、聖書が「しかし」と言って語る神様が支配される世界です。主イエスが語られた「しかし」という言葉は、この世界の現実からは見えてこない、神様が支配される世界《神の国》へと私たちを誘います。この「しかし」という言葉は、神の国の扉を開く、そのような言葉なのです。私たちが「しかし」と言う時、神の国の扉は開かれ、神様が私たちの人生の舞台へと入って来られるのです。ルターが苦難に襲われた時、“しかし、わたしは洗礼を受けている”と言い続けたのは、そうやって事ある毎に「しかし」と言って、神の国の扉を開く為です。どうぞ、「しかし」と言って、神の国の扉を開いてください。そして神様を迎え入れ、そのお力を「私の人生」という舞台上で存分に発揮してもらおうではありませんか。

(記 上山耕平)